博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	野原 将揮
論 文 題 目	戦国出土資料と上古中国語声母研究

審査要旨

本論文は戦国中期の竹簡に見える通仮（当て字用法）の諸例を主な資料として、上古中国語の声母（音節初の子音）体系再構における諸問題を考えたものである。

まず序章では中国語史における「上古」という時代区分について考察したのち、本論文の目的、基本原則、研究方法、構成について述べる。本論文の議論の前提となる中古音の体系すなわち隋の韻書『切韻』の音韻体系についての説明もある。

第 1 章では清朝考証学以来の上古音声母体系再構の学説史を概観、B.Karlgren、董同龢、S.Yakhontov、E.Pulleyblank、李方桂、河野六郎、鄭張尚芳、潘悟雲、W.Baxter、L.Sagart、など主要な研究者の学説が簡潔かつ的確にまとめられている。形声字の諧声符の資料的価値、中古二等韻の由来、第一口蓋音化、円唇母音の再構、中古合口韻の再構などをめぐり、研究史の中での位置づけ、それぞれの学説の長所や問題点を指摘した。

第 2 章では「仮借」と「通仮」の定義、形声文字の原理、諧声・通仮可能範囲、戦国竹簡を研究対象とする意義など、全体の研究方法に関連する問題が詳しく討議される。詩経などの押韻例が韻母の部分しか明らかにしてくれず、漢字の諧声符もその字の音節全体をどの程度まで忠実に表しているのか確実でないのに対し、通仮の例はその字が本字と同音あるいは類音であったことが確実であるため生々しい現実感を伴っていること、資料の書写年代や出土地点がかなり明確である点も有利であること、なども指摘される。

第 3 章からが各論である。先行研究をよく消化したうえ、声母に関する諸問題を詳細に検討、戦国竹簡の通仮例を手掛かりとして、今まで声母の帰属が不明確だった多くの字の上古音を復元するなど、全体に創見に富んだ議論を展開している。関連する甲骨文字、金文、伝世文献、後漢の『説文解字』、中古音、現代閩方言などの情報の利用も適切である。

具体的には第 3 章で①唇音 P（両唇破裂音）、鼻音 M、②T-type（歯茎破裂音）と L-type（側面音）、鼻音 N、③牙音 K と喉音 H（軟口蓋破裂音と摩擦音）、鼻音 NG、④歯音 TS（歯茎破擦音と摩擦音 S）という 4 つのテーマ、第 4 章で⑤無声鼻音 HN、⑥preinitial*s-、⑦書母 sy-の再構という 3 つのテーマが扱われる。

このうち特に注目されるのが②⑤⑦である。②は E.Pulleyblank らの仮説を戦国竹簡の面から裏付けたものである。すなわち、諧声符の分布とシナチベット比較言語学に基づく、中古音の端母系の声母（t-,th-,d-）が上古では T-type（歯茎破裂音）と L-type（側面音）に分かれるという仮説に対し、野原氏はその二系列の違いが、通仮の面でも見られることを明らかにした。諧声関係を欠くため二系列のどちらに属するか不明の字も通仮の例から決定できることを主張、多くの例を挙げたうえで「戦国竹簡において T-type は T-type とのみ通仮関係にあり、L-type とは関係しない。また L-type は L-type とのみ通仮関係にあり、T-type とは決して交流しない」という仮説を設定した。これは今後出土する資料の解読にも役立つ仮説としてとりわけ価値の高いものである。

⑤では無声鼻音（*hm-,hn など）復元の学説史を紹介したのち、懸案となっている「漢」「難」「灘」（中古音ではそれぞれ x-,n-,th-）の字音の問題、更に戦国楚簡に見える「好」の異体字｛丑＋

氏名　野原将揮

子}（「丑」が諧声符）の問題について考察、「好」と「丑」の字音の問題を解決するともに、「丑」「手」などが単語家族を構成する可能性を模索した。また、「昏」と「聞・問」の関係や「惚恍」（前漢馬王堆帛書では「沕望」）の表記の変遷に基づき、無声鼻音（*hm-など）が摩擦音（*x-など）に変わる時期について論じている。戦国時代の音韻資料の価値を確実なものとする上でも不可欠の議論であると言えよう。

⑦では、中古音で sy-と再構される書母の問題が扱われる。中古書母が現代閩方言の口語音で ts-と tsh-という 2 種の特殊な対応を見せることは知られていたが、それが上述の T-type と L-type の区別と関連すること、戦国竹簡の通仮の状況もそれを支持することを明らかにした。「閩方言で ts-であれば上古*ST（T-type、preinitial*s-）に由来、閩方言で tsh-であれば上古の L-type の*hl-および無声鼻音*hn-などに由来」という仮説も興味深いものである（たとえば、これにより「水」の字音が*ST であることがほぼ確定）。

以上のほか「田」「休」「桑」「西」「少」「小」など、今まで正確な復元が困難とされてきた多くの字について出土資料や閩方言の面から新たな手掛かりを提供したことも評価される。

終章では、上古中国語再構の課題として、「単語家族」の学説との連携の必要性が述べられ、今後の研究の方向性が検討される。

以上のとおり、本論文は上古中国語の音韻研究として大変緻密で周到なものである。先人の学説を最大限に尊重しつつ、確実な論拠を持つ時に限り自らの復元の試案を提示している点、類型論的に見て自然な復元を心がけている点、出土資料を利用した上古音復元の限界も心得ている点など、すべて野原氏の謹厳な研究姿勢を示している。審査会では楚の言語と中原の言語の違い、出土資料の特殊性、語義の面における検討不足の問題などが議論された。野原氏の論に有利な新たな例も提示された。韻母や声調の問題を含め今後の検討課題はなお多いとはいえ、本論文が中国音韻史研究、特に上古中国音の声母の研究の面で大きな貢献を為したことは確実であり、博士（文学）早稲田大学の学位を授与される価値を十分に有すると判断する。

公開審査会開催日	2016 年 6 月 11 日			
審査委員資格	所属機関名称･資格	氏　名	専門分野	博士学位名称
主任審査委員	早稲田大学教授	古屋　昭弘	中国語史	博士（文学）早大
審査委員	早稲田大学教授	稲畑耕一郎	中国古典学	
審査委員	東京大学大学院 人文社会系研究科教授	大西　克也	中国語史	
審査委員				
審査委員				